

「家がいいね」 第196号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2020.9.1

「会うよろこび」「こそ大切に」

オンラインでの「つながり」は薄いものと思えません。機器を使って会話すると、視覚と聴覚で脳は「つながった」と錯覚します。しかし信頼に値するものとはならないようです。人類学者の山極寿一さんは、人は五感の全てを使って他者を信頼するようになる生き物と言われます。特に鍵となる感覚は、嗅覚・味覚・触覚など「本来共有できない」感覚なのだそう。確かに、他者の匂い、一緒に食べる食事の味、触れる肌の感覚など、人はまだ身体的なつながりを信じています。会うこと、共にいる場を感じることは、最大の喜びの一つだと思います。コロナ感染への恐れだけで、簡単に手放してはいけない幸福感でしょう。

「無言館」巡回展から呼ぶ声でした

信州上田に在る、この戦没画学生慰霊美術館に何時か行きたいと思っていました。四日市博物館での巡回展を知り、お盆に訪れました。遺作を遺族から寄託され、開館に至った経緯は複雑でした。作品紹介文には、終戦前ほぼ一年間の期間での徴兵招集が記されています。敗戦濃厚な中での出征だったのです。描き残す絵への思いも様々です。
大正8年生れ 田中兵部さん
(伊勢市磯町)の屏風絵です。「婦人像」の題、心寄せる女性を海辺に佇ませて描いています。26歳で南洋にて戦病死、と記されていました。



田中兵部さん (伊勢市磯町)の屏風絵です。

「婦人像」の題、心寄せる女性を海辺に佇ませて描いています。26歳で南洋にて戦病死、と記されていました。

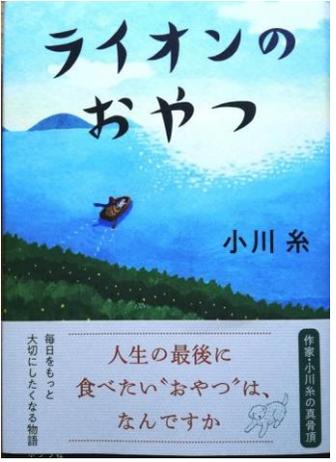
資料集に、それとなく19歳の女性の写真も添えてありました。凜とした表情を感じます。(展示は9月6日まで)



田中兵部「婦人像」(No.100)のモデルとなった女性

ホームホスピスって、こうなのかも

図書館で貸し出し順が回ってきて、次も34人待ちの大人気と知りました。瀬戸内の海を見渡す小さなホテルのような「ライオンの家」に集う様々ながん患者たちの生活物語です。病気の詳細などは説明を要さず、朝粥や定期的オヤツの発表に人生の機微が語られる展開です。きっとホームホスピスを取材したと感じました。



人の命はロウソクに似て、自らを燃やし周囲を照らすようなもので、食を得て時も輝きも増します。在宅スタッフが感じる日常性(人は最期まで耳を澄まして聴いていること、時空を超え訪ねてくる存在があること、それを魂と呼んでもいいのかな)と思うことなどが優しく書き綴られています。

不安へ息が詰まらないようお見舞いします

前号に引き続きましてヨシタケシンスケさんの引用です。暮しの手帖社の挿絵を描いておられますが、2019年5月に単行本化されたものです。「みらいめがね」
それでは息が詰まるので、
7コマ漫画「人生に必要な場所」はこの紙の裏へ、どうぞお回りください。



自宅での人生を 最期まで支援します

〒516-0805 三重県伊勢市御薊町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
<http://isezaitaku.com>

→バックナンバ閲覧可



人生に必要な場所



そうすれば虫歯にはなりません!

虫歯、いやですね!
虫歯を怖がりましょう!
虫歯を憎みましょう!

1.



みんな「虫歯の痛み」「虫歯の恐ろしさ」はたふり教えたけれど...

4.



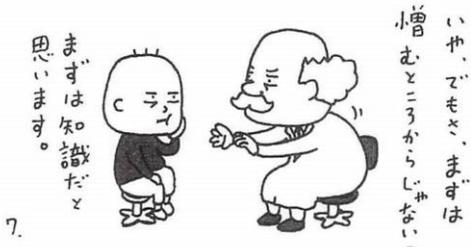
「そもそも虫歯、何なのか? どうすれば虫歯にならなにか? は、誰も教えてくれませんでした。」

5.



「虫歯がキーンストラクター」が必要なのかもね。
...そうかもね。

6.



いや、でも、まずは小むとニウからじゃない?
まずは知識だと思います。

7.



先生。止歯がイタイです。
アリャ。ひどい虫止歯だ。
こりゃ抜くしかない。

2.



どうして虫止歯にしたの?
ちゃんと憎んだ?
...はい...

3.